

I. 沿革と概要

1. 沿革

東京大学生産技術研究所は、昭和24年5月31日公布の国立学校設置法に基づき、同日付で千葉県千葉市に設置された。

その後、研究所の東京移転が実現し、昭和37年度から東京都港区六本木7-22-1に本部および各研究部が移った。なお、千葉市には、附属施設として千葉実験所が設置され、92,378 m²(約27,944坪)の面積を利用して大型実験等にあてられている。また麻布庁舎内に附属施設として、昭和48年度から、計測技術開発センター、昭和50年度から複合材料技術センターが設けられた。

2. 活動の概要

わが国における工学と工業とは、その発達の歴史において、必ずしも相互に密接に連絡されていたとはいいがたい。この欠陥にかんがみ、本研究所は、生産に関する技術的諸問題の科学的総合研究に重点をおき、研究成果の実用面への還元をも行うことによって、工学と工業とを結びつけ、わが国工業技術の水準を高め、世界文化の進展に寄与しようとするものである。このため基礎的研究を行うかたわら生産の現場と緊密な連絡を保ち、生産技術の実態を知って、適切な研究計画を立てるとともに、現場から寄せられる技術的諸問題に対しても、学術に基礎をおいた実質的な解決を図ることを重要な使命としている。

所の運営、研究態勢の基本となる研究部門は、3年計画で設置された。すなわち設立当初15部門で、以後昭和25年度に10部門、26年度に10部門を加え計35部門となり、その後、部門増として、32年度1部門、35年度1部門、36年度2部門、37年度2部門、38年度1部門が認められたが、39年4月1日宇宙航空研究所設置に伴い、39年度中に2部門を同研究所に移し、40年度に1部門、41年度に1部門増が認められ、さらに42年度には1部門が追加され、現在次に示す43部門となっている。

応用数学、応用光学、音響工学、放射線工学、材料強度機構学、動的材料強弱学、流体物理学、伝熱工学、機械力学、流体機械学、熱原動機学、変形加工学、船体運動学、切削工作学、精密工作学、化学機械学、耐震機械構造学、電子工学、電力工学、通信機器学、電力機器学、応用電子工学、マイクロ波工学、電子演算工学、情報処理工学、無機工業化学、有機工業化学、鉄鋼製錬工学、環境計測化学、工業電気化学および工業光学、複合金属材料工学、環境化学工学、金属材料学、放射性同位元素工学、交通制御工学、建築生産学、水工学、建築構造学、土木構造学、地形情報処理工学、生産技術史、環境制御物理学、生産施設防災工学。

所長は、瀬藤象二、兼重寛九郎、星合正治、谷 安正、福田武雄、藤高周平、岡本舜三、

菊地真一，一色貞文，鈴木 弘の各教授に続いて，昭和49年11月14日から武藤義一教授が就任している。

本研究所は下記に示すような5研究部に分かれ，それぞれの部において下記の専門分野の研究を担当しており，所の管理運営業務は事務部が担当している。

第1部(基礎) — 応用数学・応用光学・音響工学・固体材料学・流体物理学・応用電子物理学・放射線工学・材料強度機構学・応用弾性学・動的材料強弱学

第2部(機械・船舶) — 機械力学・機構学・伝熱工学・熱原動機学・流体機械学・装置機器学・切削工作学・変形加工学・精密加工学・溶接工学・船体構造学・船体運動学・耐震機械構造学

第3部(電気・電子) — 電気回路学・電力機器学・電力工学・電気制御工学・電子管工学・通信機器学・超短波工学・応用電子工学・電子演算工学・マイクロ波工学・情報処理工学

第4部(化学・金属) — 無機工業化学・工業電気化学および工業光化学・有機工業化学第一・有機工業化学第二・有機工業化学第三・環境化学工学・無機工業分析学・有機工業分析学・鉄鋼製錬工学・環境計測化学・複合金属素材工学・金属加工学・金属材料学・放射性同位元素工学

第5部(土木・建築) — 土質工学・土木構造学・交通制御工学・水工学・地形情報処理工学・建築構造学・建築環境学・環境制御物理学・建築生産学・生産施設防災工学・建築配置および機能学・生産技術史

計測技術開発センターは環境工学の研究に必要な計測技術の開発に関する高度の学術的業務を行うことを目的として，昭和48年4月に麻布庁舎内附属施設として設置された。昭和48年度には環境化学計測関係，さらに49年度に環境物理計測関係に人員が配当され，センターとしての業務が充実強化された。また本所の附属研究施設として，昭和50年4月に新設され，複合材料の複合機構，素材，および加工等に関する基礎的研究を行い，複合材料の開発と有効な利用をはかることを目的としている。〔50年度は複合機構部門が発足し定員としては，教授1，助教授1，助手1，技官1が配当されている〕。

これらの諸専門分野において，基礎的研究を行うとともに，数分野の間の共同研究が随時に行われているのが本研究所の特徴の一つである。

また，本所は教育活動についても，大学附置研究所の使命の一環としてこれを重視し，積極的な協力をしている。また大学院学生の教育のほかに，各種の教育制度による学外からの研究員・研究生・その他を受け入れ，これらの教育・指導についても力を入れている。詳細については，教育活動の項（132ページ）を参照されたい。

管理運営組織は，後章に記すとおり，所内に，教授会・教授総会のほか，所長の諮問機関としての常務委員会を設け，また各種の運営委員会を設置し，相当数の教授・助教授・専任講師がこの委員に選ばれている。そのほか，生産技術の実態を把握して所の研究の使

命を達成するため、昭和28年以来財団法人生産技術研究奨励会が設立され、この評議員として126名の学識経験者と産業界代表技術者に参加を願い、本所に対して、協力・助成などの事業を行っている。

3. 研究所の位置・敷地・建物・配置図

東京大学生産技術研究所

a. 位 置

東京都港区六本木7丁目22番1号

国電信濃町駅下車、都営バス防衛庁前下車 約100m

地下鉄日比谷線六本木駅下車 約800m

地下鉄千代田線乃木坂駅下車 約50m

b. 敷地・建物(面積)・配置図

敷地総面積 48,122 m² (14,557 坪 ただし物性研と共用)

建 物 数 本館1棟, 別棟17棟

建物延面積 30,414 m²

本 館 25,985 m²

別 棟 4,431 m²

本館面積の使用区分は次表の通りである (単位 m²)。

	地 階	1 階	2 階	3 階	屋 階	計
第 1 部	872	1,880	744	732		4,228
第 2 部	1,955	817	945	930		4,647
第 3 部	514	999	881	923		3,317
第 4 部	632	1,557	1,541	1,149		4,879
第 5 部	1,546	1,048	817	817		4,184
試 作 工 場	91			194		285
電 子 計 算 機 室	24		173	220		417
事 務 部	886	722	1,897	486	10	4,006
計	6,520	7,028	6,976	5,451	10	25,985

c. 主な建物とその用途

建物名	構 造	利用面積 (m ²)	所 属 部	主 な 用 途
本 館	鉄筋コンクリート地下1階地上3階	25,985	各 部	所長室, 会議室, 各部研究室, 実験室, 試作工場, 居室, 事務室, 図書室, 電話室, 受電室, ボイラー室等
別棟2	鉄筋コンクリート平屋建	102	第 5 部	床版試験室
〃 3	ブロック平屋建	32	各 部	薬品収納倉庫
〃 4	鉄筋コンクリート平屋建	52	第 5 部	防火実験室(地下)

別棟 5	鉄骨平屋建	142	第 3 部	高電圧実験室
” 6	鉄骨スレート	355	第 1 部	材料実験室
” 7	鉄筋 2 階建	200	第 3 部	応用電磁流体実験室
” 8	ブロック平屋建	8	事務部	危険物貯蔵庫
” 9	ブロック平屋建	15	事務部	廃溶剤倉庫
” 10	鉄筋コンクリート平屋建	179	第 4 部	R I 実験室
” 11	ブロック平屋建	113	第 5 部	高圧化学実験室 サッシ実験室
” 12	鉄筋コンクリート平屋建	179	第 2 部	暖房実験室 磨蝕実験室
” 13	鉄骨平屋建(中 2 階付)	923	試作工場	試作工場
” 14	鉄筋コンクリート地下 1 階地上 1 階	625	第 5 部	音響実験室(無響室, 残響室, 測定室)
” 15	鉄筋コンクリート 3 階建	795	事務部	車庫, 応用化学系共通機器室, 計測 技術開発センター
” 16	鉄筋コンクリート 2 階建	676	第 2 部	動力実験棟(自動車, 内燃機関, ガス タービン, 水力機械)
” 17	鉄骨平屋建	29	事務部	門衛所
” 18	ブロック平屋建	6	第 4 部	放射性廃棄物倉庫

d. 水道・電気・ガス・電話

水道は現在都営水道ならびに自家給水を行っており、使用量は月平均 2,000 m³である。

電気は東京電力株式会社と自家用の契約をし第 1 変電所 400kV A, 第 2 変電所 744kV A, 屋外変電所 535kV A の設備を有し、各部に送電している。電力使用量は月平均 180,000 kWH である。

ガスは東京ガス株式会社と契約、消費量月平均 10,000 m³である。

電話は青山局に 50 回線加入し、私設交換装置は A 型自動交換機で 500 回線の容量をもち物性研究所と共用している。なお、そのうち本所は内線 300 回線を使用している。

A. 生産技術研究所千葉実験所

a. 位 置

千葉市弥生町 1 番 8 号

国電西千葉駅東口下車、約 250 m

b. 敷地・建物(面積)・配置図

敷地面積 約 92,378 m² (27,944 坪)

建 物 数 31 棟 16,004 m²(仮設を含む)

c. 主な建物とその用途

建物所在 地区	所在 番号	構 造	利用面積 (m ²)	主 な 用 途
A	1	鉄骨スレート平屋建	476	試験工場(山田研, 田村研, 木内研, 水町研, 小林研)
”	2	”	352	大型構造物振動実験棟(久保研, 田村研)
”	3	”	822	構造物動的破壊実験棟(岡田研, 久保研, 田中 研, 高梨研, 柴田研, 田村研, 片山研)

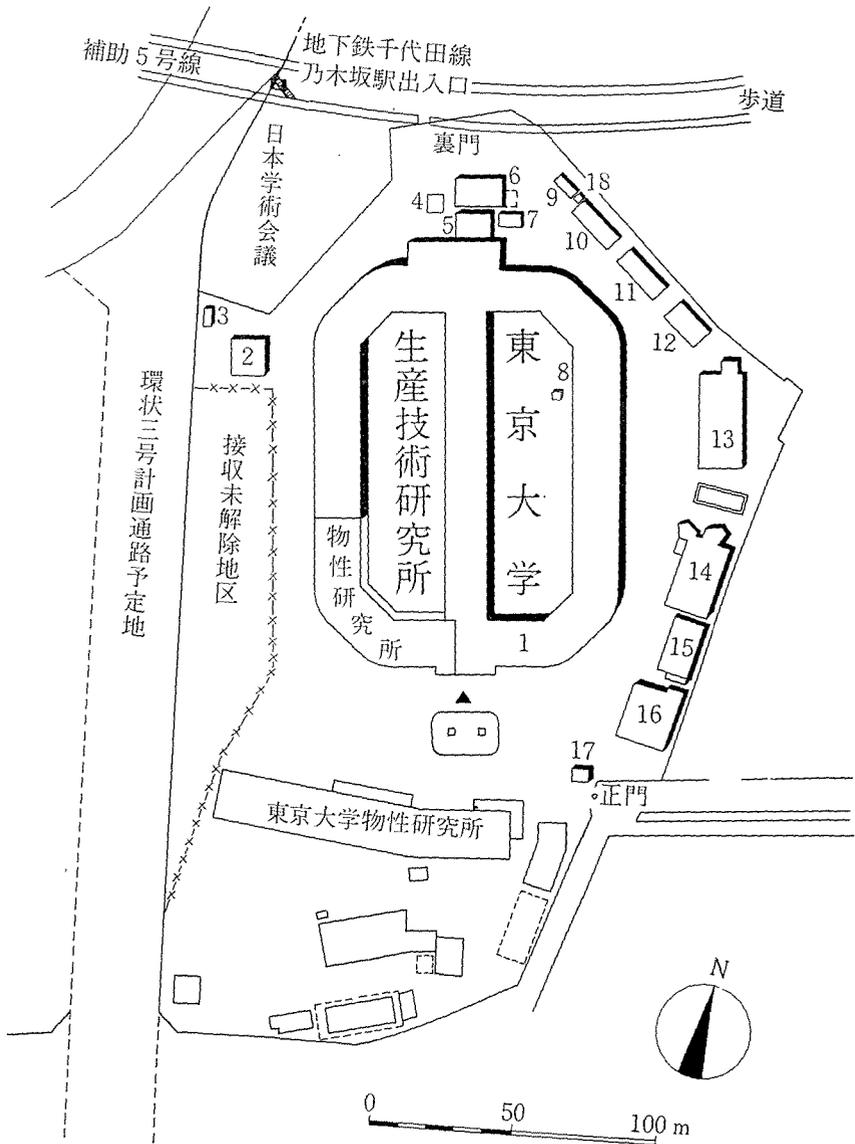
A	4	鉄骨スレート平屋建	40	構造物動的破壊実験棟 (岡田研, 久保研, 田中研, 高梨研, 柴田研, 田村研, 片山研)
"	5	"	46	"
"	6	"	39	"
"	7	鉄骨平屋建	39	中村研
"	8	ブロック造平屋建	30	正門
"	9	ブロック造平屋建	54	レーザおよびミリ波実験設備(斉藤研, 藤井研)
"	10	"	19	危険物倉庫
"	11	硝子漏洩試験設備		河村研
B	1	木造2階建	1,291	山田研, 北川研, 田村研, 鈴木・木内研, 中村研, 益子研, 水町研, 原研, 事務室
"	2	"	1,017	山田研, 北川研, 田村研, 鈴木・木内研, 河村研, 小林研, 三木研
"	3	木造2階建	511	武藤研, 河添研, 館研, 柴田研
"	4	木造平屋建	194	柴田研, 中村研, 村上研
"	5	土質工学模型実験設備		三木研
C	1	木造2階建	1,208	加藤研, 館研, 勝田研
"	2	木造平屋建	356	館研
"	3	鉄骨鉄筋コンクリート平屋建	317	"
"	4	溶鉱炉自動秤量施設		"
"	5	ブロック平屋建	9	R I 薬品庫
"	6	木造2階建	1,215	宿舍
D	1	鉄骨・瓦葺葺・平屋建	38	受電室
"	2	木造平屋建	9	柴田研
"	3	鉄筋コンクリート平屋建地下つき	60	"
"	4	鉄骨平屋建	2,656	船舶航海性能試験水槽実験棟 (工学部)
E	1	"	3,375	水工学実験棟 (井口研)
"	2	木造平屋建	194	武藤研, 井口研
"	3	ブロック平屋建	63	武藤研
"	4	"	38	館研
"	5	木造平屋建	129	ポンプ室
"	6	鉄骨スレート平屋建	23	二次元造波水槽測定室
"	7	鉄骨平屋建	1,349	津波高潮実験棟(生研, 震研, 工学部, 理学部)
"	8	ブロック平屋建	35	同上観測室

d. 水道・電気・ガス・電話

水道は現在千葉県水道局ならびに自家給水を行っており、使用量は月平均5,000 m³である。電気は東京電力株式会社と自家用の契約をし、変電所は300 kVA の設備を有し、所内に配電している。電力使用量は月平均45,000 kWhである。

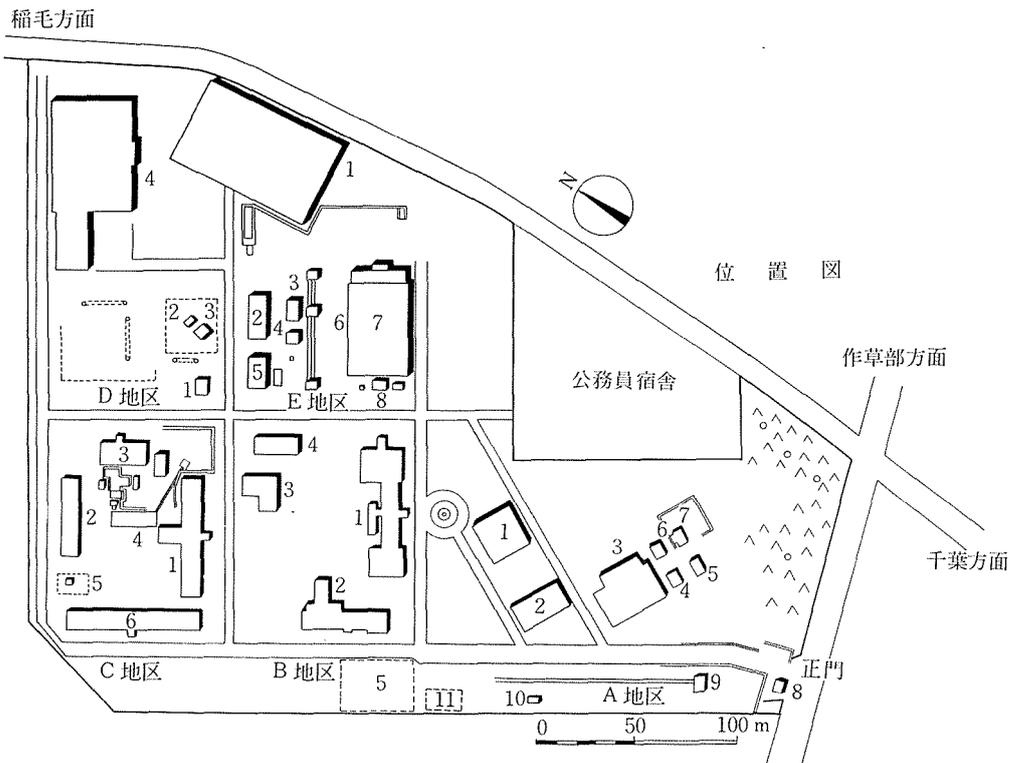
ガスは東京ガス株式会社と契約、消費量月平均2,500 m³である。

電話は千葉電話局に9回線加入。私設交換装置は、クロスバ型自動交換機で、内線60回線を使用している。



東京大学生産技術研究所 配置略図

東京大学生産技術研究所千葉実験所 (配置略図)



B. 計測技術開発センター

環境工学の研究に必要な計測技術の開発に関する高度の学術的業務を行う。48年度以降化学関係の計測技術の研究および開発研究を行い、ついで環境物理計測を増設した。

48年度の定員として、教授1，助手1，技官1が配分され、49年度はさらに助教授1，助手1，技官1が加えられた。